

極楽通信

UBUD

VOL.21



# U • B • U • D I • N • D • A • H



photo:Y.Hori

以前にも踊り子のことを書いたが、バリでレゴン（ラッサムやクラトン）などを踊る子は、信じられないほど幼い場合が多い。通常は小学校などに通っている普通の女の子であり、制服を着て通学中に道で会っても、昨夜見た踊り手だということはたいていの場合わからない。

こういったあどけなさの残る子が、レゴンの衣装を着て化粧を施すと、ガラリと変貌を遂げる。その妖艶な横顔はとても子供とは思えないほど悩ましくなり、踊る姿は妖精か天女のような荘厳さをたたえることがある。その美しさは見る人すべてを満ち足りた気分させてくれるだけでなく、サンヒャンのように神様も乗り移って一緒に踊りたくなることがあるようである。

堀 祐一

# Contents

● Kabar Baru Berita Lama エナちゃん選挙初体験-----	4	● TOKO BEST 店 Kacak Perak-----	22
● Perawatan Anak 【3】 正しい出産と育児 in BALI-3-----	6	● Warung 味な店 Cafe Ankasa-----	22
● Belajar Tari&Gameran -14- 私と踊りとガムランと／14-----	9	● Pondok Manis 私の常宿 Nuriani Guest House-----	23
● JEGOG -3- ジェゴグの歴史・文化-----	10	● Pesan & Kesan 旅人一声-----	23
● The Twilight Rider カヤック-----	12	● Berita Terbaru その他のニュース-----	24
トレッキング-----	13	● Orang-orang Ubud/21 うぶんな人々／21-----	25
● Pin-Pin-Boh/1 インドネシア語講座／1-----	15	● Pengumuman でんごんばん-----	26
● Cinta Pohon BINGIN -3- 愛しのバンヤン樹 -3- -----	16		
● 留学生日記／3 コスの一日-----	20		
● C・O・L・U・M・N バリ恋愛症候群について -その2- -----	21		

## ○表紙のことば○

BALIの女の子達は小麦色が美しく  
NICE BODYです。

そういう女の子を見飽きているから  
太根足でハチハイト  
白い肌の日本人がもてる  
という話を聞いた事があります。

本当かウソか理由はともかく  
日本人で良かった!

BALIに行く度に思います。

成田君子

## 編集室便り

### ●入稿に関するお願い

編集部では、MacintoshによるDTP作業で版下を作成しています。原稿をお寄せくださる方でText Dataで入稿可能な方は、以下の方法をお願いします。

Macintosh format の FD (Text Data)  
 Dos format (2DD-720KB) の FD (Text Data)

E-Mail :

MHC03202 : 菅原 (NiftyServe)  
GCB01162 : 堀 (NiftyServe)  
hori@potomak.com (Internet)  
eriko@potomak.com (Internet)

※詳細は、裏表紙にある日本連絡先事務所までお問い合わせください。

## 特派員報告 エナちゃん選挙初体験

去る4月29日、前号でもちらりとお知らせしましたが、インドネシア全国総選挙が行なわれました。エナちゃんは昨年の8月に、インドネシアの国籍を取ったので今回の選挙で投票することができました。その様子をここで少しご紹介しましょう。

投票の資格があるのは17歳以上の成年。去年のはじめ頃に、村々で投票のための申請カードが各家庭に配られ、誰と誰が資格があるのか氏名と生年月日をカードに書き込んで提出すると、バンジャールごとに投票者リストが作成されます。そして、投票に参加する人は、当日会場になっているバレ・バンジャールに直接行き、受付で投票者リストと照合されて、そこで初めて投票用紙が渡されます。ここには日本のように完璧な郵送システムもないし、事前に投票用紙を配ってもきつと当日までになくしてしまう人が多いのでしょうか。

インドネシア語で選挙のことをプミリハン (Pemilihan)、またはプミル (Pemilu) といいます。でも、バリの人々 (エナちゃんのまわりの人々) は、なぜか「ニョブロス (‘突き刺して穴を開ける’の意味のバリ語)」と言うのです。そう、インドネシアの投票のしかたは、紙に印刷してある各党のマークのうち、自分が選ぶ党のマークのところに穴を開けるのです。

4月に入ってずいぶん各党の選挙活動が盛んになってくると、村で誰かに会うたびに、エナちゃんは「あんたもニョブロスすかね?」とよく聞かれました。

うちのゴッド・マザーであるおばあちゃんに、「ダドン (おばあちゃん) は、ニョブロスするの?」と聞いてみると、「おお、わしゃあ以前に4回したことがあるが、もうせんよ。バンジャールまで歩くのもひと苦労だからね。」と、この頃思うように動かなくなってしまった足をなでながら答えてくれました。うちのダドンの言うことには、インドネシアの選挙は1955年に初めて行なわれ、投票の方法も昔からこの方法だったとか。考えてみると、字が書けない、読めない人も、この方法だったらわかりやすく間違いなく投票ができますね。

さて、4月中旬になると、TVのニュースでは、バリ以外のインドネシア各地で選挙運動にともなって起こった暴動とか、各党の内部のもめごと、多勢の市民を巻き込んだテロなど、非常に物騒な事件を毎日のように報道するようになりました。それと同時に各党の党首や幹部による選挙演説、市民も交えた質問会などがいつもの娯楽番組と差し替えてに放映され、まさに全国で選挙一色。

「当日は、ホテルやレストランの従業員もぜ〜んぶ投票に田舎に帰るから、一斉に休業だ。ツーリストは困っちゃうね。」

「その日は、テロ防止のために飛行機も飛ばないらしい。」

「この頃は、選挙のせいでバリに来るツーリストが激減してるっていうよ。」

なんて会話がツーリスト相手にビジネスしているバリ人の間で交わされたりもしました。エナちゃんが今までバリ滞在中、2回の総選挙がありましたが、自分が実際に初めて、今回投票する立場に立ったせいか、投票日が近づくにつれなんだかドキドキ、ソワソワ。昔のようなクーデターは起きないとしても、妙にどことなく不穏な空気を感じたりして落ち着きませんでした。

さて、いよいよ4月29日、総選挙当日。

「朝いちばんに行くと混んでるからね。」と言うお義母さんに従って、結局エナちゃんは主人とふたりで締切 (2:00) 直前の1:30頃、投票所であるバレ・バンジャールへ。すでにほとんどのバンジャールの人々は投票を終え帰宅したあとで、警備係を担当する親戚のお兄ちゃんやバンジャールの役員さんたちが、受付のテーブルでナシ・チャンプルのブックスを広げてワイワイと食べているところでした。

投票者リストの私の名前のところにチェックを入れると、色の違う3枚の紙が渡されました。青、白、黄の3枚の用紙はそれぞれジャカルタ中央政府、バリ州、ギアニャール県という選挙区分になっています。3枚の紙には皆同じ印刷がされていて、真ん中に大きく三つの党のマークが横に並んでいます。プリンギンの木のマークのゴルカル (Golongan



Partai Persatuan Pengbagunan



Golongan Karya



Partai Demokrasi Indonesia

Karya)、水牛のマークのパー・デー・イー (Partai Demokrasi Indonesia)、星のマークのパー・パー・パー (Partai Persatuan Pengbagunan)、この三つからひとつ選ぶというわけです。

さて、投票用紙を受け取ったあと、バレ・バンジャールの壁ぎわに造られた小部屋に入ります。小部屋といってもブティックにある試着室のようなものが二つ並んでいて、壁材にはおなじみ竹で編んだブデ、そして、カーテン替わりに踊りの時の金ピカのランセイ (幕) が使われていて笑ってしまいました。そして、幕を開けて中に入ると…、小さな机の上に、小さな枕のような汚いクッションのようなものがポツンと置いてあり、その横には机にひもでつながれた【くぎ】のようなものが一つころがっています。噂には聞いていてわかってはいましたが、心配症の主人が私のところに入ってきて「ほら、こうするんだよ。」と説明してくれました。それは、(1) 投票用紙をクッションの上に置く。(2) 自分の選ぶ党のマークのところを【くぎ】で刺して穴を開ける。という実に簡単なやり方でした。なるほど、かたい机の上では紙にちゃんと穴が開けられません。「へ～え」と感心しながら年期の入った、おそらく何度も選挙で使われたであろうその枕のようなクッションのような長方形の黄ばんだものを眺めていると、「コラコラ、部屋にはひとりずつ入りなさい。いくら夫婦でもサマサマ(いっしょ)はダメだよ!!」と、ナシ・ブックスを食べ終えた警備係に叱られてしまいました。選挙のことを「ニョブロス (突き刺して穴を開ける)」と、バリの人々が言うのはこんな投

票のしかただからなのですね。

エナちゃんが聞くところによると、人によっては投票に参加するけども白票 (どの党も選ばない) ということもあるそうで、その場合昔はどこにも穴を開けずに投票箱に入れたそうですが、時にはその白票があとで何者かによって穴を開けられたりという不正も行なわれたので、今の白票はすべての党に穴を開けてしまわないといけないということでした。そして、3枚の紙にそれぞれ穴を開けると、それを小さく折り畳んで部屋を出、会場の真ん中に置いてある投票箱に入れるのです。

というわけで、無事「ニョブロス」を終えたエナちゃんなのでした。

日本の物々しい投票を経験しているエナちゃんは、今回のインドネシアでの初選挙は結構余裕で楽しんで(?) することができましたが、初めて投票に参加した知り合いのバリ人 A ちゃんは、「もうドキドキしちゃって、ニョブロスする手が震えちゃったわ。」なんて言ってました。

投票が終わってからも、ジャワのある街では投票箱が何者かによって燃やされたりして、再投票を行なうなどたいへんだったみたいです。

結果は、どの選挙区も現政党のゴルカルが圧勝。たいへん騒がしかった1997年の選挙もこれで終わりました。

以上、特派員エナちゃんによる、「ニョブロス (笑)」の報告でした～♪。



# 正しい出産と育児



by ムーン・ストーンの花嫁

NOMOR 3

## ■第3弾「妊婦はつらいよ・パートII」

### ●むくんでトホホ

妊娠8ヵ月頃のことである。ある朝目覚めてみると、なんだか足のつま先の感覚がいつもと違っている。

朝の早起きは最大の苦手なのだが、バリ人家庭にいったん嫁入りした者としては、自分だけ以前のように昼まで寝ているわけにもいかない。だから今、約6時に起床して2～3時間は意識もうろうの状態、上と下のまぶたが強力な磁石のようにくっつきあうのを無理矢理こじ開けて過ごすのである。そんなわけで、その朝少々足の感覚がおかしいからといって特に気に止めもしなかった。寝呆けまなこで台所の大きな縁台に腰かけて、いつもの朝のパンタン（お供え物）の準備を始める。ヤシの葉、またはバナナの葉を小さく切り揃えて簡単に折り、一ヶ所スマツ（竹ヒゴのようなもの）で止めて出来上がり。それを85コ。今度は小さな舟型に折ったものを20コ。「えーと、85コのうちジャジョー（お菓子）用は20コだから、いち、にー、さん、しー…」と一生懸命数えていると、そこへ庭掃きを終えた義妹Aが、竹ぼうきを振り回しながらやってくる。

「モ（正しく表記すると -mbok- お姉さんの意）、パンタン用のジャジョーはあそこに置いてある袋の中に…ん！？アドウ～！！モ、モ、モの足、どうしたのっ？！」  
「へ？ 足？」

「そうよ、その足、いったいどうしたのおっ？！」  
「どうしたの？って、別にどうもしな……ひ、ひえーっ！！！！」

ここで私は、その朝始めて自分の足を見下ろした。そこには見慣れぬ他人の足があった。足の指と指の間にあるはずのあの適度な隙間もなく、それはまるでゴム風船をふくらませたような、あるいはまるで水死体のようにふくらんだ足であった。



Illustr: Yume-Hime

「なに これえ～ ∞」思わず日本語で叫んでしまった。

『むくみ＝妊娠中毒症の可能性の高い症状です。むこうずねを指で押してみても、すぐもどるようなら心配ありません。押したところがしばらくへこんだままの時は、至急医者に診てもらいましょう。』と確か「安産の本」に書いてあった、どれ、むこうずねを指でぐいっと押してみても…。ああ、へこんだままである。まるで人間の足ではなく、何かハ虫類の、たとえばヘビの胴体を指で押したような感触だ。まさか、自分がむくむなどとは思ってもみなかった。よく見ると、手も少しむくんでいる。むくみというとピンとこない人も多いが、私のそれは「はれる」と言ってもいいほど、ひどいものだった。とにかく手の甲や指に、いつもあるはずの適度のシワが伸びきって、なんだかつるつる、プヨプヨしていて非常に気持ちが悪い。指で押したところが、へこんだままになっているむこうずねを見下ろしたまま茫然自失になっている私のまわりに、お義母さん、お義父さん、義妹たちや叔母さんまでが、ワイワイと集まってきて口々に勝手なことを言い始める。「嫌だわ、怖い怖い、こんなにむくんで。」

「カンギンの親戚のクトウトツなんか、もっとすごかったわよ。」

「そういやあクトウトツは、血圧も高かったと言ってたなあ。どれ、あとで川にマンディに行きなさい。すぐ治るかもしれんぞ。」

「とにかく減塩よ。食事の塩分控えなきゃ。」

ワイワイ、ワイワイ。そこへ、バリ人にしては朝寝坊の夫・Dが、まだ眠そうな目をこすりながらやってきた。「なんだなんだ、何の騒ぎだこりゃあ。」

私は不安のあまり、頼りになるはずの夫に、泣きそうなか細い声で訴えた。

「私の足…、こんなにむくんじゃったのよ、どうしよう…。」「えっ?、足?」

Dは、私の足を見下ろしたかと思うと、そのまま5秒ほど硬直したまま動かず黙ってしまった。そして、次のリアクション。なんと、いきなり腹を抱えて笑い出したのである。「プピーッ、ウッ、わ、笑っちゃいけないんだけど、象の足だあ〜。」

妊娠している自分の妻の足のことを、いくら可笑しいからといって「象の足」はないだろう。一瞬、怒りにふるえたが、そこまで言われちゃ仕方がない。悔しいが家族も皆、Dにつられて笑っている。目に涙をためて笑いながら、それでもDは「あとで医者に行こうか。」と言ったので、先ほどの暴言は許すことにした。

### ●ティアラ・デワタが医療機器か?! 私の選択。

そして再びドクトル・S。今回は体重も計らず、私のむくんだ足をなでたり押したりしたあと、妊娠以来初めて血圧を計ってくれた。でも、「う〜ん、血圧はノルマル（正常）だよ、ワッハッハッ、ティダ・アパ・アパ。塩分のとりすぎだけには気をつけなさい。」…? ……本にはティダ・アパ・アパじゃないと書いてあったぞ。そして、もうひとつ気になっていたことを訊ねてみた。「ドクトル、産むとしたらどの病院がいいでしょうか?」ドクトルは少し考えて、「トパティのD・Y病院はどうだい? 家から近いし、医療機器も揃っているし。」ドクトル・Sは検診だけをこの小さなクリニックで行

なっていて、お産の時は自分と契約している大きな病院のいくつかから患者が選ぶことになっているのである。

ドクトル・Sの言った「医療機器が揃っている」という言葉に、私はとても心魅かれた。「お産の時、何かあったら…。」と思うと、小さな病院もしくは産婆さんなんかで産んだら救急車もないし、この島の道路事情から考えるときっと助かるものも助からないに違いない。よし、D・Y病院に決めた…と、待合室で待っているD（例のU・S・Gを使った検診以来、Dは再び診療室の中までついてくることはなくなった。）に言うと、「え?! D・Y? ダメダメ、うちの親族は皆、デンパサールの陸軍病院で産んでいるんだ。そこが一番いいよ。看護婦も陸軍病院だからキビキビしているしね。」

お産で何かあった時にいくら看護婦がキビキビしてたって、肝心の医療機器が揃ってなかったらしょうがないではないか。それに親族がどこで産もうが私は私だ。

その日は帰りの車の中で、ちょっとした口論になって少々険悪なムードのまま家に帰った。そして家では家でやはり親族一同が口を揃えて言うのである。「産むなら陸軍病院にしなさいよ。なんと言ってもティアラ・デワタがすぐそこなんだから。」そうか、わかった! 本心はこれだ。皆、お見舞いがてらにティアラ・デワタ（大型ショッピングセンター）でショッピングするのが目的なのである。私は看護婦よりもティアラ・デワタよりも、医療機器をとるぞ。誰がなんと言おうと私はD・Yに決めた。どこで産むかについての論争は、さすがのDもついに折れて、「好きなところで産めばいいよ。」とさじを投げた。ところが、この件に関して私の選択は誤っていたことをあとで自分自身で身をもって思い知らされることになる。それは後日書くことにしよう。



## ●お産の前にイカン・パンガン。

いよいよ10ヵ月目に突入。《10ヵ月目に入ったら、いつ産まれても大丈夫。入院の準備をしっかりと整えておきましょう。》と本に書いてある。でも、《入院に必要なもの》のうちいくつかは、日本にあってもバリにはないものである。「産後の出血とか、普通の生理用ナプキンじゃ小さすぎてダメだよねえ？」とお義姉さんに聞くと、「カマン（サルンのこと）をたくさん持っていけば大丈夫。」と言う。「汚れたら洗えばいいってことね…。」郷に入れば、である。日本にあるとても便利で清潔な医療用品いろいろは、考えないようにしよう。それにしてもこの2ヵ月間むくんだままの足、産後ホントにもとに戻るのだろうか…。

いろいろ考えていたら、とうとう予定日の8月9日になった。男性にはわかりづらいと思うが、最後にあった月経のあと約2週間後が受精のタイミングなので、最終月経が何月何日だったかちゃんと覚えている人は、ほとんど正確に出産予定日を算出することができる。…で私の場合は、8月9日が予定日なのだった。でも、初産の人は特に予定日より1週間前後遅れるのが普通であるので、8月9日を過ぎててもそんなに気にせず、そのまま1週間待ってみることにした。そして、インドネシア独立記念日を明日に控えた8月16日。さすがにちょっと不安になったので、ドクトル・Sに行った。その日、検診のあとで、私とDはイカン・パンガン（魚のグリル）を食べに行く約束をしていた。待合室で順番を待つ間、Dはベモターミナルの裏手にあるそのイカン・パンガンがどんなに美味しいか、魚に添えてある生のサンバルがどんなに風味豊かに調味されているかを、まだそこに行ったことのない私に生き生きとていねいに語ってくれた。ここんとこ、はちきれんばかりのお腹を抱えてさすがに外出できず、家にこもりっきりで食生活におおいに不満を抱いていた私の口からはもうよだれが垂れんばかりである。

…というところで名前を呼ばれて、いやがるDの腕をひっぱっていっしょに診察室に入る。ドクトル・Sは、私を見るなり大きく目を見開いて「オ～？！まだ、産まれてないのか？！」「はい、だから来たんです、今日。」「アドゥ～、もう出さなきゃ。どれ、U・S・Gで見てみよう。」「…？！もう出さなきゃ？そんなにせっぱつまる必要はないはずだ。ちょっと不安になってきた私のお腹に探触子をあてながらドクトル・Sは、今まで見たことのない深刻そうな顔つきで、なにやらDにバリ語で説明している。ところどころわかる単語から想像するに、どうも胎児はかなり大きくなっていて、そのぶん羊水（ドクトル・Sは、“液体”という単語を使った）が少なくなっているらしい。だから、今すぐにも切って出さなければならぬ、という言葉だけは、ド

クトル・Sは私にもわかるようにインドネシア語で言った。事態は思わぬ方向に進み始めている。私は正常分娩で産むことしか考えていなかった。Dも顔が青ざめている。切って出すということは帝王切開、ということは手術なのだ。…と思っただけでスーッと背筋が寒くなった。

そんな私たちの表情を見て、ドクトル・Sはなだめるように言い添えた。「とにかく今すぐにD・Y病院に行きなさい。私から常勤のドクトルに電話しておくから。もしかしたら手術じゃなくて、陣痛促進剤を使うことになるかもしれないから、ティダ・アパ・アパだよ。」その言葉を聞いて私はさらにおびえた。促進剤が使われた妊婦が、日本で子宮破裂をおこしたり、激しい子宮の伸縮のために、脳障害をおこして産まれてくる赤ちゃんがいたりして、今日本で問題になっているあの薬を使うかもしれないと言うのだ。この時の「ティダ・アパ・アパ」ほど、憎らしく聞こえた「ティダ・アパ・アパ」はなかった。あまりの事態の予想外の急展開に思考が麻痺してしまった私は、くっつかかかのようにドクトル・Sに訊ねた。「ドクトル、病院に行く前に、イカン・パンガン食べてもいいですか？！」一瞬、目をしばたいて、ドクトルは「も、もちろん。どうぞどうぞ。」と優しく言ってくれた。万が一何かあっても後悔しないように、そこのイカン・パンガンだけは食べておきたい。暗い沈黙のまま、私とDはイカン・パンガン屋に入り、でてきた魚をモソモソと無言で食べた。…と、Dが突然泣きそうな顔で言った、「ねえ、赤ちゃんのさあ、頭の中の液体が少なくなってるって、もしかしたらノーマルな赤ちゃんじゃないんだろうか？」「は？頭？」「頭もこんなに大きくて下にさがってるのに、子宮の中の液体（要するに、日本では羊水と言うのだ）が少なくなってきた。これは難産になるおそれが充分にあるので、今すぐにも切って、云々」と言うドクトル・Sの言葉をDは、何を思ったか“Babyの頭の中の液体が少ない”と聞き違えたのである。

ただでさえ不安でいっぱいなのに、この期におよんでそんな縁起でもない聞き間違いをしたDに、私は言葉を返す気力を失った。私は無言で食べ続けた。Dもそれ以上話すのをやめ、ナシ（ご飯）をおかわりしている。DはDで、「こんな事態になってるのに、よく平気な顔して魚食ってられるな。」と、私のことを思っていたに違いない。

このあと手術になるかもしれないのに、いくら美味しいといえお腹いっぱい魚を食べた私は、やはりあとで身をもって辛い思いをすることになるのである。

とにかく、暗い食事を終えた私とDは一路D・Y病院に向かって車を走らせた。





## 私と踊りとガムラン

伊藤陽子

半年の滞在予定でアユさんに踊りを習って三ヶ月が過ぎました。今回、日本を出発する際、友人など周りの人に「何のために踊りを習うの?」としばしば聞かれました。チョンドンのチョの字も知らず、ただ踊り子に、そして踊りを習うという行為に憧れて、気軽に習い始めた私にとって、その質問は、どきっとするもので、「スペインでフラメンコを習う人のように、私はバリでバリダンスを習う…」などと、とんちんかんな答でお茶をにごしていました。そんなやりとりの後、旅立った私ですが、三ヶ月経った今、そのあやふやだった答が見つかった様な気がします。それは結局「好きだから」の一言につきると思いました。踊りが、バリが好きだから、自分のために習いたいのです。

今回、長期での初めての一人暮らしで、不安だらけだった私を、色んな人が助けてくれ、そして、私の世界を広げてくれました。又、日々の風景(例えば、高く高くすとのびたヤシの木や偶然でくわしたパレ・ガンジュールの音色など)が私をとりこにします。そんな素敵なお人達との出会いや、バリの自然の懐に抱かれて過ごす毎日が、私を幸せにします。

そして、いつもの練習のある日、私はアユさんに聞きました。いっこうに上達しない自分に嫌気がさして、練習が楽しくないと思っていた時のことです。「アユも踊りを始めた頃は、しんどかった?」今日のアユさんの素晴らしい踊りが一朝一夕でできたものではないと分かっている、思わず聞いてしまいました。するとアユは「Ya setiap hari sakit. Tetapi mau」と答えてくれました。その時のアユさんの表情は誇らしげで、私は、子供の頃のアユさんが毎日毎日練習している姿を想像し、つらくても「マウ」と思いつけたその言葉の重みに感動しました。そんな踊り魂のアユさんの「マウ」には、ほど遠い今の私ですが、私なりに「マウ」「好きこそもの上手なれ」で、これからも踊りを、バリを、好きでいつづけたいと思っています。

## ジェゴグの歴史・文化

和子 スウェントラ

写真提供：小原孝博

極楽通信購読者・ジェゴグファン、そしてその他の皆様こんにちは、お元気ですか。第19回バリ芸術祭もこの6月15日に開催されました。当日、オープニングにて貴賓席の目の前にて2台のジェゴグが堂々と勢揃い、重低音とコミカルな音の響きをうねり出し、副大統領はじめ文部大臣、州知事、観光客そして観衆の心が一同に引き集まりました。他にジェゴグセットを車に載せ、行進しながら演奏をするという例年にない演出を致しました。それというのも同じバリ人で未だにジェゴグ音楽を見たり聞いたりした事のない人も含めた観衆に、隅から隅まで音を聞いて楽器を見ていただき、もっとジェゴグを知ってもらうためでした。

前回の極楽通信で、ジェゴグ紹介シリーズにあたって数年来の応援者、堀さんの文章の中にはじめてサンカルアゲン村の(財)スアール・アゲンに訪問して下さった時のことが書かれてありました。ちょうど日本からのレコード会社とジェゴグ音楽録音契約をし、契約の中に雑音を避けるために部外者立ち入り禁止と言われた録音日に、甥が断りきれず招いたお客様が堀さんグループでした。今だから話しますが、あの時は録音許可契約済み、先払い受け取り済みの立場上、あのような行動に出してしまったのです。私(和子)自身の性格ではないのです。それはこの数年のお付き合い(主人も含めて)の中でわかっていただけてきたようですね! その証拠はスタッフにもあげなかったナシ・ブンコス(葉で包んだ御飯)をあげたことでしょう.....心の中では言いたくもない言葉、思われたくもない態度(うるさそうなコーディネーターと思われた)をしていたようですが、正直者(??)は困りますね、つい素直に演技ができて.....

でも、思えば忘れられない印象に残っている訪問者でした。堀ちゃん、エリちゃん、そして今は結婚して益々仕

事に光が射してきたカメラマンの小原ちゃん、ゴメンナさい。今では大切な協力者・姉弟です。バリに来たらスガラの実家に寄って下さい。

それと、この書面を通じて堀ちゃん一族をジェゴグ・スアール・アゲンそしてスウェントラと和子のファンの筆頭に公認致します。たとえ、法律事務所にてサイン無しでもOK!!

前回約束したように、ジェゴグの歴史・文化の紹介予定でしたが、堀ちゃんがVol.19で、求めていたジェゴグ音楽に巡り合った時の特報を紹介したおかげで、私の企画が変更されてしまったことをお許しください。

ここから約束致しましたジェゴグの歴史・文化を話します。

前回も書きましたが、人類の誕生以前に竹が地球に存在していたと信じています。自然体の気温湿度と風の動きの中で左右に揺れ、ぶつかり合いながら自然にジェゴグ演奏を奏でていたことでしょう。そして人類の誕生と共に生活が始まり、生活の中でも竹が必要とされ、現代の生活、儀式に欠かせない貴重な必需品となります。

生活の中で組合と村人のコミュニケーションを素早く取るために考えられたのが、クルクルという竹筒のベルでした。毎日、時・村の行事・緊急事態を素早く伝えてくれます。ある時は恋人への竹コールの役目を果たし、ある人は自分の意思を竹コールを通じて打ち明けることもできました。その音を文章を通じて意思表現できないのが残念ですが、なんとなく空想できますよね! 本当に自然は素晴らしいロマンです。

私はその時代に生まれていたら、今の夫（前の夫がいたのかしら）から心臓まで突き刺す程の重低音でモーションをかけたか、かけられたのでしょうかと、フツと目に思い浮かべます。（ヨケイナ、ヒトリゴトデシタ...）

そのように村の中を鳴り響きわたった音から、村人は家族の生活の中に娯楽を求めるようになり、竹の楽器を考え出しました。始めはメロディーのない、ただ心に伝わる響きを感じ楽しんでました。時が経つにつれて、祈りの音が音階として作曲されました。

一般のアジア諸国、インドネシア・バリ音階は5音階、7音階ですが、ジェゴグは4音階と演奏者の心からの音が加わると言っています。もっと簡単に言いますと、東西南北の4神のパワーを授かり、演奏者を通じて音が響きだすと信じています。（五心音階）

このような生活の流れから、ジェゴグ楽器・音楽が生まれ、重要な奉仕をしています。

ジェゴグとは偉大さ、深界という意味です。事実、一番大きい竹筒は長さ約3m、直径20cmはあり、重低音から最高音まで押し合いへし合いの音がうねり響く深い音で観衆の心に染み込み酔わせます。ジェゴグは村々の収穫後の喜びを家族や村人と感謝を込めて祝うため、年行事、各家の祝い事などに演奏します。

ジェゴグ楽器はガムラン・ジェゴグと学名上登録されています。スアール・アグンの団長であるスウェントラ氏が語っていました。

「バリ人にとって、握る・掴むということは、生活の源力になる。すなわち、しっか物を握る・掴む、そこには神が宿り、神に掴まることによって良い家庭、生活が過ごせる。ガムラン／打楽器を演奏することは神に掴まり、神を握ることだ。演奏者は打楽器を演奏することによってタクスーに出会うことができると考えています。」

タクは力、スーは運、またはすばらしさのこと。つまりタクスーとはすばらしい神の力を意味しています。バリ島には新旧合わせて20種類位のガムラン／打楽器があるといわれています。バリではガムランを3つの時代区分に分類します。

- 1) 古来16世紀以前から、東ジャワのマジョパイット王国がバリに移住を始める頃。
- 2) 中世音楽で、マジョパイットによって16世紀以後、ジャワからもたらされた音楽。
- 3) オランダの植民地が本格化し、在来王朝の勢力が衰退してからの音楽。

上記の3つの時代区分を見ると、ジェゴグは近代音楽です。今でこそ皆様のご支援により盛んに演奏されるようになったジェゴグですが、300年近くオランダ

の植民地とされ、第二次世界大戦中、インドネシア独立戦争時代にかけてオランダの植民地支配政策により、伝承が途絶え廃れていました。オランダが支配地域の反乱を恐れ、弾圧を加えたためです。オランダの怖れとは、竹筒を竹槍にして農民が攻撃してくることで、それを止めるための政策でした。

演奏を禁止された農民達は生活から生まれた娯楽を奪い取られ、悲しみと悔しさにますますオランダへ攻撃を加えました。禁止されたジェゴグ楽器の竹筒は没収され、残された足（楽器台）が農家の軒下に崩れ置かれていました。

禁止されてから何十年の歳月が過ぎました。口には出せない農民達の気持ちは、いつまたジェゴグが村で演奏できるのかということで、この日を思いながら過ごしていました。

しかし、歴史と文化をオランダ政策だけで消すことはできませんでした。それはバリ島の歴史・宗教そして生活、もちろん文化と芸術が一体になっていて、時代が終わっていないからです。

ここで、禁止前に演奏していた老人が、自分の息子に遺言のように語って頼んだ願いがありました。

それは、今一度、ジェゴグを復活させることでした。

この続きは次回号を読んで下さい。それまで購読者、ジェゴグファンの皆様、お元気でご活躍、お過ごし下さい。

Terimakasih! Sampai jempa lagi!!





## 神秘の湖・タン布林ガンで… カヤック

黄昏野ライダーは、カヌーイストとして名高い野田知佑氏のカヌー姿に憧れ、かねてから一度はカヌーに乗ってみたいと思っていた。今回はその念願をかなえるため、愛バイク HONDA を陸に残すことにした。

カヌーはラフティングなどで有名な SOBEK 社の主催する“神秘の湖・タン布林ガン湖”でのカヤッキングである。そして、これがかねてからの憧れの人である、椎名誠の“あやしい探検隊”を真似て急遽“あぶない探検隊”を発足するため、というよりは、一人で行くのが心細いので数人の友人を誘った。隊長は黄昏野ライダー、隊員は名古屋の友人 Y 氏、最近 UBUD に長期滞在を始めた S 氏、UBUD でコーヒー店をオープンした K 氏、UBUD でブチックを経営している K 子ちゃん、その友人の M 氏の 6 名である。全員があぶない初体験である。

6月8日：AM / 9:30、K 氏が寝過ぎて参加できなかったが、5名の“あぶない探検隊”は予定より一時間遅れで、一路目的地に向けて出発したのであった。



目的地タン布林ガン湖は、「極通」Vol.17の“原生林を訪ねて”で取材した神秘的で、少々不気味な感じもする湖である。

AM/11:00、タン布林ガン湖に到着。湖岸にはすでに、オレンジ、パープルなど色とりどりのカヤックが並べられてある。湖岸でライフジャケットなどの装備を装着したあと、インストラクターからカヤックの操作の説明を受ける。カヤックにはペダルが付いていて、右折、左折にはそのペダルを踏んで、うしろに付いている舵を操作する。オールだけでの右左折が少し心細かったがこれで安心。一人乗りと二人乗りが用意されていた。二人乗りにはうしろにインストラクターが同乗する。なんといっても“あぶない探検隊”は全員初体験、みんな不安顔は隠せない。S氏とK子ちゃんは二人乗りで、あとは一人乗りである。黄昏野ライダーも不安ではあるが、カヌーイストとして出発する第一歩、度胸を決めて一人乗りに挑戦することにした。

カヤックに乗り込み、ペダルの調節をし、浸水を防ぐカバーを取り付ける。オールを手に持ち「さ～、出航だ！！（カヤックも出航というのだろうか？）」

インストラクターの手がカヤックから離れると、いきなりバランスが崩れる。オールをひと漕ぎしようとする、カヤックが左右に揺れ、今にも転覆しそうである。バランスがとりにくくて腰が落ち着かない。身体をあまり揺らさず、おっかなびっくりオールを動かす。前に進む、しかし、右の藻の群生する方向に行ってしまう。慌ててペダルを踏むが力をいれると揺れるので、慌てながらも静かに踏む。少しづつ慣れてきた。風が無いのもさいわい、もっともインストラクターが二人に一人付いているので安全である。藻に突っ込む



こともなくなり、なんとか湖の中央に向かう。5分もすると、すっかり慣れてきて、カヤックは湖面をすべるように進みだす。気分はもう、野田知佑。湖岸を見渡す余裕もでてきた。湖岸の原生林では鳥の鳴声がする。まだまだ、カヤックを操るのに必死で観察することはできなかったが、バード・ウォッチングにも最適。湖から寺院に入る道がある。村人は、湖岸で見かけた丸太を切りぬいたカヌーでかけてくるのだろう。途中、湖岸に上陸してランチ・タイム。そのあと30分くらいのジャングル・トレッキングをして、再びカヤックに乗り込む。全行程3時間ほどでもとの湖岸に戻ってくる。“あぶない探検隊”は、もういっばしのカヌーイストに成長。そして、黄昏野ライダーの上半身は筋肉痛に襲われている。全員心地よい疲れをお土産に帰路についた。

(色がちょっぴりリゾートしているが、静かに自然を楽しむカヤックは、景観破壊、環境破壊にはならないかな。ご意見、ご忠告がありましたらお便りください。)ちなみに料金はUS \$68 (一人) でした。



## バトゥールで初挑戦！ トレッキング

何を思いついたか、黄昏野ライダーは、カヤッキングに続いてバトゥール山のトレッキングに挑戦することにした。実は来る7月25日は黄昏野ライダーの50歳の誕生日である。そこで、人生の節目の記念として、最初で最後であろう霊峰アグン山の登頂の計画をたてた。が、日頃運動不足の鈍った身体で、果たして霊峰アグン山登頂が可能かどうか不安で、とりあえず低い山でトレーニングすることにしたのがこの計画の始まりである。今回もカヤッキングと同様“あぶない探検隊”の隊員を募ったが、さすがに旅行者は、「バリまで来てそんな疲れることはしたくない」ということで参加者がなく、結局、挑戦したのは、隊長の黄昏野ライダーと、UBUDの王宮前にコーヒー・ショップをオープンした若干28歳のK君の二人だけとなった。そして、UBUDに長期滞在を始めたS氏がトレッキングには参加しないが、付き添いとして参加することになった。

トレッキングは早朝出発のため、前日はバトゥール湖畔のトヤ・ブンカ村にあるLAKE SIDE

COTTAGESに宿をとった。この宿は、CV.JERO WIJAYAというツーリスト・サービスもしていて、“あぶない探検隊”はこのサンライズトレッキングに参加することにした。バリの人と結婚し、小さな男子のいる、ほのほのとした家庭的雰囲気のあるK子さんが経営している。

ここだけの話だが、黄昏野ライダーはトレッキングと登山は違うものと思っていた。トレッキングはハイキングの少しハードなもの、そして登山は結構命懸けのもの。そう思っていた人は多いと思う(知らないのはお前だけだ。の声)がどうもこれは同じことのようなのだ。

バトゥール山は、標高1,717m。日中は暑かろうが、早朝の登山は寒いことが予想される。熱帯のバリに長期滞在を始めて7年の黄昏野ライダー、日頃はズボンとTシャツの生活のため、登山靴はもちろん登山用品など持っていない。登山は足元が肝心と、昔、先輩からの助言があったとのことで、靴はデンパサールのマタハリ・デパートでトレッキング・シューズを購入。普段着のズボンと長袖のシャツに身を包み、友人からお土産にももらった雨カッパをヤッケ替わりに着込み、インドネシア独立50周年記念の帽子をかぶるという奇妙な出で立ちが、黄昏野ライダーの登山ファッションである。

K子さんの畑で採れたゴボウの煮物で夕食を済ませたあと、テラスで満天の星を望む。キラキラと輝く、UBUDより数倍多く見える星に寒さを忘れ、しばしうっとり。星が10分間隔で流れていく。明日の登山の無事を星に祈る。

PM/10:00・仮眠。

AM/ 3:30・起床。

AM/ 3:45・コテージのレストランで朝食。

AM/ 4:00・宿からバトゥール山の麓まで車のトランスポートがある。まだ、身体が起きていない。

AM/ 4:30・さあ、いよいよバトゥール山頂に向けて、30年ぶりの登山に出発だ。

まだ夜の明けない暗い道を、懐中電灯の灯りをたよりに歩き始める。バトゥール山のシルエットがはるか頭上彼方に見える。もう後には引けない。麓のなだらかな道を歩きだすだけで、すぐに身体が火照りだす。足元の灯りをたよりにただ黙々と歩く。だんだんと勾配がきつくなっていく。まわりには木が一本もなく、あるのは溶岩にこびり付くように生えている雑草だけである。道は砂地だったり岩場だったり足場が悪い。ときには道とは思えないところを歩く。どこか地球と違う惑星に迷いこんだかと勘違いしてしまうほど荒涼としている。一時間ほど歩いた頃、あたりが白け始め、しだいに夜が明けてくる。目前には、立ちのぼるバトゥール山、眼下には、バトゥール湖に朝靄が幻想的にかかっている。観光客がバトゥールの展望に立ち寄るペノロカン村にあるホテルの灯りが遥か下方に見える。幾度か小休止をしながら進み、いよいよ最後の勾配にさしかかった。頂上が見える！もうひと踏張りだ！！

一歩一歩、自分のペースを崩さずに昇る。

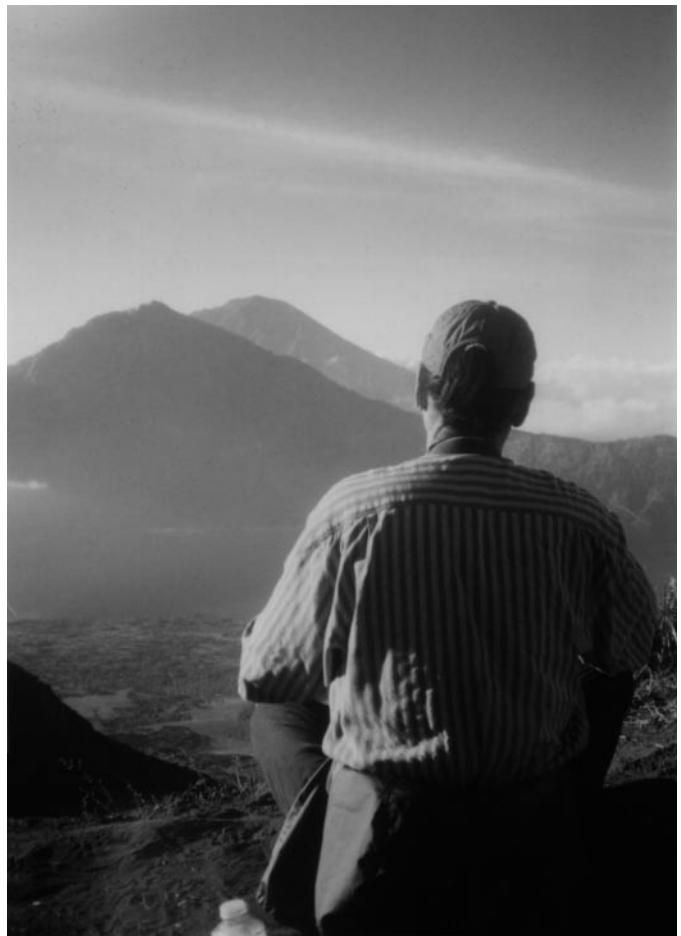
AM/6:00「登頂」「ついにやったゾ！！」  
よくここまで頑張った身体に感謝。

頂上は寒く、吐く息が白く見える。しかし、気分は最高。朝陽が昇るにはまだ少し時間がある。アバン山のうしろに一際高くそびえているアゲン山に向かってムスポ(=お祈り)をする。線香の煙を身体にかけると、なんだか身体がすーと軽くなる。お祈りは“無”の境地。心と身体が洗われた心地である。

頂上にあるワルンであったかいコーヒー (Rp:2,000-)を飲みながら、太陽が昇るパフォーマンスを觀賞。下界では決して観ることはできない、太陽からのプレゼントである。

下山は景色を見ながらのなだらかなハイキング・コースである。

体力に自信のある方、せっかくバリまで来たのなら少々疲れはするが、バトゥール・トレッキングをしてみてもどうだろう。「疲れ」の代償に、きっと素晴らしい「何か」を体験できるに違いない。



●一ヶ月後に挑戦するアゲン山を望む筆者



## ■シンカタンの嵐

去る5月29日の総選挙／PEMILU=Pemilihan Umumは、おおかたの予想通りゴルカル、GOLKAR=Golongan Karya（各分野の職能グループ）の圧倒的勝利に終わった。選挙の詳しい話は、他の筆者のレポートに譲るとして、この選挙の運動期間中、TVや新聞は言うに及ばず、日常の雑談の中でも、とりわけ目立ったのがシンカタン= Singkatan、すなわち「略語」の氾濫。いわく DPR、PPP、PDIあるいは、先の PEMILU とか GOLPUT（白票）、ETC。

これらの言葉のなかには、日本で編纂されているインドネシア語の辞書に、すでに登録されているものもあるが、その数はごく限られている。GOLKAR や DPR=Dewan Perwakilan Rakyat／議会、は掲載されているが、政党の名前、たとえば PPP=Partai Persatuan Pembangunan／開発統一党は出ていなかったりする。イスラムを党原則とするこの政党の名が、インドネシア語の辞書に載っていないというのは、強いて言えば、バリ島の地図からブサキ寺院が脱け落ちてしまっているようなものか。ちなみにこの PPP、発音はもちろんペーペーペーでいいのだが、実際の話の中では“ペーティガ”=P tiga と呼ばれていた。

選挙や政党といった堅い世界だけに Singkatan があるわけではもちろんない。よく耳にするところではカーターペー、KTP=Kartu Tanda Penduduk／住民票というのがある。一種のアイデンティティ・カードのようなもので、16、7歳になると登録・所持が義務づけられ、不携帯の場合には罰金を課せられることもあるそうだ。

われわれ日本人にとっては、アンデンティティ・カードそのものが珍しいのだが、くわえてインドネシアのお国柄をあらわしているのが、AGAMA／宗教の項目だろう。イスラム教、ヒンドゥー教、キリスト教、仏教といった各個人が信奉する宗教が、KTP には記されている。

## ■ドジで間抜けがあたりまえ？

さて、今号から連載のこのインドネシア語講座、いきなりがっかりさせて申し訳ないのだが、筆者はインドネシア語の専門家でもなんでもない。さらに正直に言うと、インドネシア語など正式に勉強したことなんか一度もないのである。いわゆる「習うより慣れろ」式でいままでなんとかやってきた。タイトルに銘打ってある“現地調達版”というのはそういうことなのである。

だからこの講座では、辞書にもテキストにも載っていない言葉や表現を、なるべくたくさんとりあげて実際に使ってみよう、ちょっとしたニュアンスをまじえた言い回し、あるいは禁句など、できるだけ会話に役立ちそうな表現をとりあげていこうと考えている。

ところで筆者のペンネーム《ピンピン坊》であるが、実はこれも Singkatan。最近聞いた Singkatan の中でも特に気に入って、ことあるごとに使っている。もとの言葉は Pintar Pintar Bodoh、略して Pin-Pin-Boh となる。ふだんはしっかりしているのに、意外なところで抜けてたり、肝心なときに思わぬボカミスをした相手に使う。「ドジ!」「マヌケ!」といったところか。

というわけで、びんびん坊が講師をつとめるこの講座もなかなか用心しなくてはいけない。むやみやたらと信じてはいけないのだ。





# 愛しのバンヤン樹

Cinta Pohon BINGIN

3

小野寺あつこ

## Warungへ行こう!

日本人は病気だと思ふ“Sakit Bersih”。ただのきれいな好きではない。すでに病気の域です。この病気の人は残念だけどWarungでうまい<sup>巒台</sup>Nasi Canpur<sup>ナシ・チャンプル</sup>は食べられない。

何度かBaliの人たちを誘ってレストランで食事をした。“おいしい?” “うん、おいしい!” と返事は返ってくるけど、いまひとつ反応がなー、と思ってたけど。Warungで食べて納得! これじゃあレストランの食事はうまい訳ない。毎日、評判のWarungやサテ屋さん、パダン料理屋さんを教えてもらって一緒に食べに行く。うまいよー!! 絶対うまい! ナシ・チャンプル三昧の日々。

## Tidak Apa Apa?

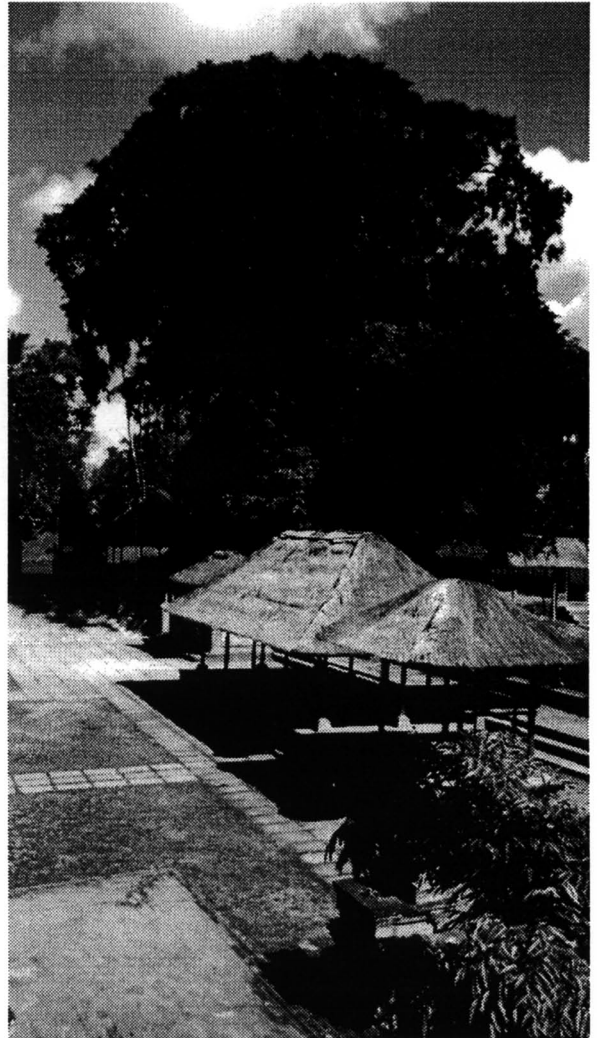
Baliの人は絶対“Tidak Apa Apa”な人たちじゃない! Tidak Apa Apaの場所が全然ちがうんだ。

よーく考えてみよう。今気にしてる事って本当に大事なこと?

## 強力なゴミ収集者

どこの家へ行ってもニワトリがいる。親鳥のあとをヒヨコたちが付いて歩く。いつも賑やか。おもわず私も後を追う。

どこの家へ行っても庭がきれい。ゴミひとつ、草一本ない。くだものを食べる、その辺に捨てる。捨てたそばからさっきのニワトリ・ヒヨコ集団が食べていく。なるほどー。



美しいPura Samuan Tigaのバンヤン樹 /Budulu

そういえば、昔の農家じゃ草取りもしないのに、庭に草が一本もなかった。そうか、奴らのおかげだったんだ。

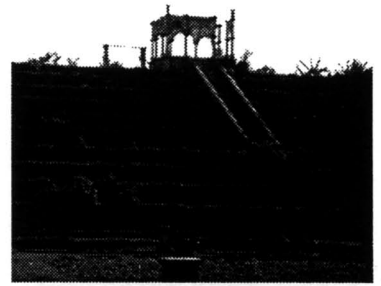


## Ujunで夕涼み

“あそこまで行ける?” 私の声に、小さな姉妹を連れて女の子が振り向いた。美少女!! どう多く見ても10代半ばの女の子。自分の体ほどに束ねた薪を頭にのせて歩いてる。お腹が大きくせり出して、もうすぐ赤ちゃんが生まれるんだ。“いけます”胸がなんだか切なくなる。あまりに、夕刻のUjunの風景に、その姉妹たちの歩く姿が似合ってる。一緒に階段をのぼっていく。

“きついね”と言うと“うん、疲れた”と言って、時々立ち止まりながら、無表情に遠くを見る彼女の顔はとても美しい。

上の宮殿跡まで来ると、おじさんが2人夕涼みしている。私も座って仲間に入れてもらう。海を見渡ししながら、風を受けていると、ずっとこのまま動きたくなくなる。宮殿跡化してしまう私です。



▼ Tamblinganまでの一本道



▲将棋でも打ちたくなるね Bapak  
夕方、海からの風が涼しい Ujun

## Tamblingan

— 夏休みの道 —

Bedugulから、3つ並んだ湖の中の一番小さな湖へ行ってみる。

ブラタン湖  
Danau Bratanを後にすると、また山をのぼる。上までのぼりきると、真っすぐな一本の田舎道。下に見ながら、背の高いバナナの木の間を通っていく。Puraではオダラン。バイクのおじさんはお葬式。うーん、思わず吉田拓郎の“夏休み”を口ずさみながら歩きたい。この道を“夏休みの道”と名付けよう! と鼻歌まじりの私の前に、Tamblinganの湖へおりていく道はけわしい。“本当に行けるの?”車がひっくり返るんじゃないかと思うほど。“ウギャー”とか“助けてくれ!”とか言いながら着いた湖は、静か。人も静か。森も静か。そして涼やか。



## 🌀 Sawanまでのオフロード 🌀

Sawanのお祭りを見にでかけた。

YehketipatからSawanまでの山道は、そりゃあすごい道。オフロードバイクでジャンプしながら走ったら、天まで飛べる、それは、それは、しあわせな道。

山の道づたいに小さな村が並んでいる。小さな子どもも、ばあちゃんも、にわとりも、犬も、にぎやかにみんな一緒!! という感じ。どの村も道の半分は、クローブのじゅうたん。今度は、のんびり歩いて回りたいなー。

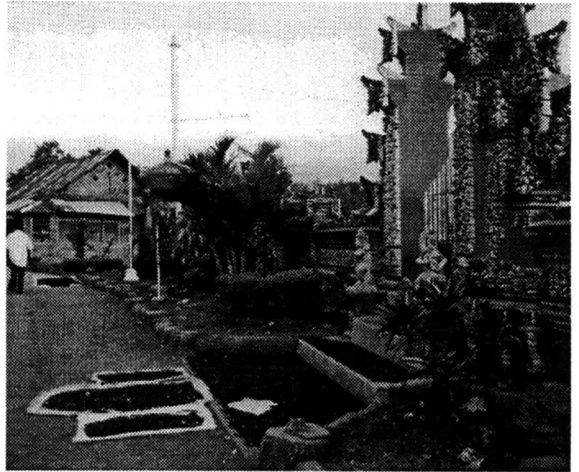
途中でトイレに行きたくなる。Warung<sup>屋台</sup>に寄ってトイレを借りよう。Bali式トイレもすでにマスター。



Puraの中はお供物と祈る女性で満員

◆ Baleganjur / この音は地霊を呼び起こす音とも静める音とも言われている。死者のたましいばかりではなく、生きている者のたましいさえも天に飛ばしてしまう音だと思う。

Ubud の Pura Dalem での Baleganjur 隣でジッと聞いていると私にもガラムがまわってきた



クローブの絨毯

と思ってたけど、こうやって山の小さな村へ来ると、よほどお金持ちじゃないと Kamar Mandi<sup>お風呂とトイレの部屋</sup>はないんだ。それは、直接肥料だよね。Warungのおばちゃんは、近所の大きな家へ連れていってくれ、トイレを借りてくれた。ありがとう! どこまでも世話のやける私でした。

Sawan にやっとたどり着くと、<sup>◆バレガンジュール</sup> Baleganjur。前に Warung が出ていなければ、通り過ぎてしまうほど小さな Pura。Ubud で “Sawan のお祭りを見に行く” と言ったら、“Pura へは入れないよ” と言ってた。そうか、何家族かの親族が祀る、小さな Pura のお祭りなんだ。外部(たとえ Bali 人だとしても)の者が行って Sembahyang<sup>お祈り</sup>させてもらうって、そうとう凶々しい事なんだ、とここまで来て初めて気づく。それでも村の人たちは、奥へ入れとすすめてくれる。感謝!!





## またここに来てしまう訳

言っておきますが、私は超能力者ではありません。靈感が鋭い訳でもありません。全然鈍感な奴です。ただ、ただ、見たまま、感じたままを書いているだけです。そこんとこわかってください。

Baliへ来るたび、いつも助けてくれるのは<sup>ニョマン</sup>Nyoman。

あの村へ行ってあれが聞きたい。この村でこれが見たい。あの人の家へ行ってお話しする。彼女んち遊びに行く。山の中のあの木に逢いたい。

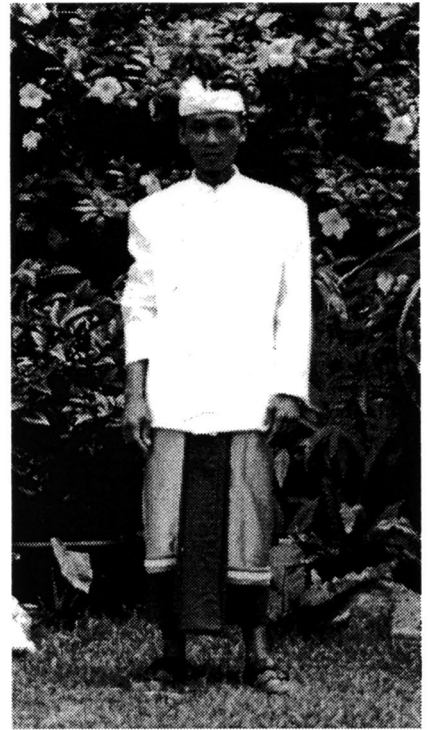
いつも、いつも、欲張りな私を見捨てず、アドバイスしてくれたり、細かに道を教えてくれたり、自分のバイクを貸してくれたり、遠くの村までつきあってくれたり、頭の上からぬ人なのです。

彼は普段は、だだのおしゃれなヤンキー兄ちゃんです。でも笑うと、彼のまわりはキラキラと輝きだします。なんだこれは？と思うんだけど、本当に突然、輝く。

“Nyoman Indah!!”と言うと“Indah”は風景に使う言葉だよ。と言って、またキラキラと笑います。

初めて<sup>きれい</sup>Tirta Sariを見に行ったとき、Gamelanをたたいていた<sup>ブトラ</sup>Putraが、となりの兄さんと話して笑った。パーと彼のまわりが真っ白になる。

Peliatanに住んでる男の子の家で、<sup>儀式</sup>Upacaraがあるからおいでと誘われる。おじゃまして彼のおじいちゃんと話す。ニッコリ笑ったとたん、湧き出てくるエナジー。



Nyoman Indah!!

こんな人があちこちにいるんだよ。そんな光を見るたびに、私は幸せに満たされてしまう。欲望も打算も猜疑心もある心の中で、この笑顔のパワーは何？ 何度でも、何度でも、この場所に來たくなるのも当然!!





Illust:Chizuru

朝、いつもきまって一番に起きるのは、わたしの右隣に住むKだ。彼女が起きてラジオをかけると、その騒々しい音でようやくわたしやIやNが目覚ます。

そうして、わたしのコスの日が始まる。

まずは朝のマンディ。どんなに寒くてもこれだけは絶対かかすことのできない、バリ人の身だしなみだ。もちろんわたしもそれに従っている。マンディを終えると、服を着替え、化粧をし、8時の授業に遅れないように学校へいく支度を始める。

かねてより、デンパサールで見かける女の子ってみんなお洒落だわ、と思っていたけれど、コスの彼女たちも可愛い服をいっぱい持っていて、ほんとうにうらやましい。UBUDで見かける女の子たちに比べ、実にファッショナブルだ。それもちゃんとその日の授業内容を考慮したお洒落をしている。たとえば、踊りの実技の授業のある時は、上着は汗をかくのでゆったりめのTシャツ、下は学校でカインを巻くとき恥ずかしくないように(S・T・S・Iに更衣室はない)スパッツをはいてから、その上にジーンズやテロンとしたレーヨン生地のパantsなどをはき、足元はヒールの高い靴かサンダルでさめる。それが理論だけで実技がない日には、上着が長袖や半袖のシャツ・ブラウスあるいは、チビTなどに下は同じくジーンズやレーヨン・パants、足元も同じく靴かサンダル、といった具合。そして、最後の仕上げは口元の赤い口紅。これが彼女たちの通学スタイルだ。

「ユキッ! 学校に行かないの?」

「うん、今日はいかないよ。個人レッスンだけなの。」

留学生といっても、外国人は皆聴講生扱いなので単位を取る義務はなく、ほとんどの外国人留学生は自分の参加したい授業にだけ、たまに学校に顔をだすぐらいで、個人レッスン中心の生活をしている。わたしもそうだ。

「行ってらっしゃい!!」

たいてい一番遅く出かけるわたしが、みんなを見送ることになる。

## (3) コスの一日

ユキ

「ユキッ! お先にね!!」

コスから学校まで歩いて5分とかからないところを、彼女たちは今日もバイクに乗ってでかけて行く。

昼すぎ、わたしがレッスンを終えて帰って来るころには、たいていみんなも帰って来ていて、短パンにTシャツというラフな格好に着替えくつろいでいる。

「ユキッ! マカン!!」

近くのワルンで買って来た、千ルピアのナシ・ブンクスを食べていたNが声を掛けてくれる。ちなみに食事は昼も夜も、このナシ・ブンクスだ。

「うん、ありがとう。わたしもブンクスを買って来たから。」

自分ひとりだけでもぐもぐと食べるということは絶対にしない彼女たちは、必ず「マカン!」と声をかけてくれる。こういう心遣いってなんだか嬉しい。

いっしょになってご飯を食べながらしばらくの間雑談をし、それが一段落すると昼寝。だいたい3時過ぎくらいまで、コス全体が少し静まりかえるひとときだ。

さて昼寝から目を覚まし、洗濯、アイロンなどの雑用をすませてしまうと、もう夕方のマンディだ。このあとプナリである彼女たちは、もうひと働きしなくてはならない。踊りの仕事だ。S・T・S・Iのプナリたちは、人それぞれではあるけれど、たいてい個人でアルバイトにレストランやホテルに踊りに行っている子が多い。Iは日曜日を除く毎日クタのレストランに踊りに行っているし、NとKも少なくとも週に二・三回は必ずホテルなどに踊りに行く。そうやって貯めたお金で、彼女たちは、お洒落をするための洋服を買うわけである。聞くとところによると、一回踊りに行くと一万ルピアぐらいもらえるから、ふむ、結構たまるのだ。

ところで、夜、踊りに出掛けるアルバイトがない日はということ……、パチャールが部屋を訪ねて来るのである。……なるほど。

こんなふうには、彼女たちはいつきでもひとりになることがない。ひとりになることを嫌がり、寂しがり、そしてまわりの人間をもひとりにさせてはくれない。わたしの唯一のプライベートな時間であった夜も、彼女たちのアルバイトのない日やパチャールが訪ねてこない日には、当然わたしが相手をする事になり、わたしのプライベートの時間はむなしくもなくなってしまふのである。

そんなこんなでコスの日が今日も終わっていく。



# バリ恋愛症候群について

## - その2 -

長期滞在者 M 嬢

れんさし  
COLLUMN

Nは、私より10歳年下だが、もうすでに4歳の男の子の母親。“お母ちゃん”という感じの、たくましきバリ人女性である。少し口うるさくて、ちょっとがさつなところもあるんだけど、私が暑さにはばててちょっとしか御飯を食べなかったりすると、「やせちゃうよ」「からだこわすよ」とか言って、市場でお菓子を買ってきてくれたりする、優しいところのある気のいい“お母ちゃん”である。

そのNが、二人目の子供を流産したと聞いたのは半年位前のこと…。

心配になってNの家に行ってみた。

Nは意外と元気にしていたけれど、やっぱり、流産した子供の話をする時は、うっすらと目に涙がにじんでいる。黙って聞いているしかなかった私に、Nが突然言った。「ウチのダンナね、浮気してるのよ」

Nのダンナ。こいつは結構かっこいい奴なのだが、これがNによると、ここんこ帰って来たり来なかったりなのだ、と言う。

「ダンナの家族に責められてね。ダンナが帰って来ないのは、お前のせいだって…。そんなの知らないわよ。私はダンナも子供も一緒に暮らしたいのに、ダンナが帰って来ないんだもの。流産したのも、回りからあんまり色々言われて疲れちゃったからよきと…。」「で、あなた、彼の浮気のことどうして知ったの?」「手紙があったのよ。相手は日本人よ。写真も見たとし、私、彼女の住所も知ってるわ。」

言葉が出ない、とはこの事だ。一体こういう場合、何と言えればいいのだろうか。

断っておくが、私はここで道徳論を展開しようとは毛頭思っていない。奥さんがいるから、子供がいるからって、好きになっちゃったものはしょうがない。そういう事だって、世の中にはある!と思う。

でも、同時に又、私はこうも思う。恋愛って、本当はフェアであるべきものじゃないか…。

もっともこれは、あくまでも“私の意見”。恋愛がフェアじゃなきゃいけない、という決まりがあるわけではもちろんない。障害があればあるほど、ピュアな恋愛だ、という意見もあるだろう。これから先は、だからあくまで私の個人的見解だと思って頂きたい。が、しかし…。

どうにも私、この手の話…なんて言うのか…つかかかものを感じるのだ。それは何故か…。

ツーリストにとって、バリの空気、バリに限らず旅先の空気というものは非日常だ。非日常というものは、果てしなく続く日常すなわち“ケ”の間に、効果的に配置された“ハレ”の瞬間、と言い変える事が出来る。ツーリストというものは、この“ハレ”の瞬間を続けて享受出来る種類の人々だと、私は思うのだ。これは余程の長期滞在でない限り、二ヵ月程の滞在なら、充分に“ハレ”の日々、と言えまいか。“特別”なのだ。しかし、バリの人にとってはどうだろう。バリ人にとって、ここはけして“ハレ”だけの場所ではない。バリ人にとってここは“日常”の場所なのだ。

そして、“非日常”のテンションの高さに、“日常”が太刀打ちできるわけがない。

これは“フェア”じゃあないのではないかと私は思うのだ…。

—とは言うものの、この島の空気は、正直、誰をも恋する人にしてしまう。甘くてまとわりついてくる様で、ざわざわと心が鳴って落ち着かなくなる…。これも事実…。恋愛っていうのは、とてもプライベートな問題だから、他人は口出し出来ない。傷つくのも、傷つけるのも、自由。

でも私にはどうしても、ちょっとばかり気にかかってしまうのだ。

あれから半年。つい最近、Nがまた妊娠したという事を聞いた。

予定日は12月の終りという事。彼女は元気いっぱい…。

願わくば、丈夫な赤ちゃんの誕生を、私は祈るばかりである。

## Toko ◇ BEST 店

### Kacak Perak

JLハヌマンからJLデウィシータに入ってワルンを通りこして、しばらく行った左側。前からずっと工事中だったところが、とうとう完成し、またしても何軒かのお洒落お店がオープンしました。今回、ご紹介するのは、そのうちの軒“カチャ・ペラ”。

ガラス製品、ココナツのボタン、お香や銀のアクセサリといった小物雑貨のお店です。

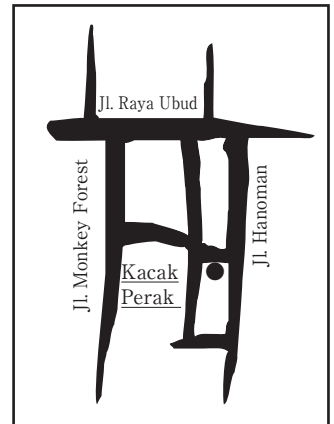
銀のデザインは、ごとごせずにシンプルでしっかりしたものがかり。二連リング、三連リング、アングレット、トゥリング等、センスのある品が揃っています。バリではよく見る“メラミン”という素材を使った灰皿やカップは“カチャ・ペラ”の可愛いロゴ入り。お香の種類も豊富です。

ここで特筆に値する可愛いスグレモノを見つけました！

クバヤ生地で作ったブラウスです。クバヤのレースというのはとにかく色が綺麗！。生地屋さんに並んでいるのを見ると、つい欲しくなってしまうませんか？実は最近、このクバヤ生地を使った洋服を売る店、少しずつ出ています。なんととっても総レース！可愛いくないわけがない！ここにあるのは、衿なし、ノースリーブ、腰のあたりまで隠れるプレーンなデザインのもの、衿、袖つき、ミニ丈のデザインのもの。ピピットなピンクやイエローはGパンに、紺や黒なら、白や生成りのスカートにあわせるというのはどうでしょう。

オープンして間もないお店ですが、小さいスペースに色々なものが詰まっています。是非、お気に入りの一品をみつけてみてください。

Jl.Dewi Sita Ubud-Bali Tel : なし 営業時間 : AM/9:00 ~ PM/7:00



## Warung ◇ 味な店

### Cafe Angkasa

とっても素敵なカフェがまたひとつ、ウブドにオープンしました。

その名は“アンカサ”。インドネシア語で“空”“天”“宇宙”という意味。

小さな店ですが“志”は高い。

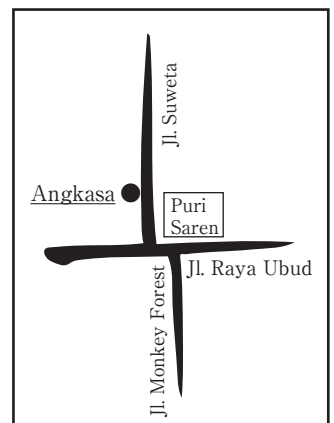
コーヒーの豆はオーストラリアから輸入し、日々炭焼き自家焙煎。カウンターの中でフィルターを使って、一杯一杯たててくれます。コーヒーや紅茶に添えられてくる小さなクッキーをはじめ、クリームチーズケーキ、バナナビスコットの粒々のはいったバナナアイスクリーム、カスタードプリンやバナナコック等、ほど良い甘さの手作りデザートが、暑さにバテ気味のからだに嬉しい。スパゲティ、ピザトースト等の軽食メニューもあります。お店が自信をもって薦める“アンカサ・ブレンド”の他にアイスコーヒー、イリアンジャヤの豆を使った“イリアンジャヤ・ミルク・コーヒー”、毎日飲みに来るほどのファンがいるという“カプチーノ”、最近でこそ美味しいコーヒー屋さんの増えたウブドですが、マシンを使わず一杯づつたてている手作りの味はやはり違います。

それにもうひとつ、実はこのお店で使っているお水はティルタ・エンブルの“聖水”。スタッフが正装で、毎日汲みに行っているという…。なんと御利益のありそうなコーヒーではありませんか。

場所はプリ・サレンの四つ角からJL.スウェタに入って50m位行った左側。オレンジ色の壁がひときり目立つので、すぐわかります。夜11時と、比較的遅く迄営業しているので、ダンスが終わった後、ふらりと立寄るのも良いでしょう。

是非、ここウブドでしか味わえないコーヒーの味を堪能してください。

Jl.Suweta No.1 Ubud-Bali Tel/Fax:97739 E-Mail:kotetsu@dps.mega.net.id  
営業時間 : AM/11:00 ~ PM/11:00



Tokoz Sayang + お店紹介

# 私の常宿

Pondok Manis

## Nuriani Guest House

TAKA-CHAN

私の見つけたおきにいりの宿は、JL.RAYA UBUD から JL.SUGRIWA を南に下ったはずれにある NURIANI GUEST HOUSE。

宿の前には、水田が広がり、2Fの部屋からの眺めは最高！

夜になると、時々、ホタルも遊びにきます。また、満月の夜、田んぼの向こうの木々の間からのぼる月を見るなんていうのも BAGUS です。

レストラン (SUNSET CAFE & RESTAURANT "NURIANI") とワルン、それにフォト・ショップ (PHOTO COLOUR SERVICE CENTRE "LAKSAMANA") も経営しているので、食事のオーダーも可。写真もスタッフに頼めば、その日のうちに持ってきてくれます。

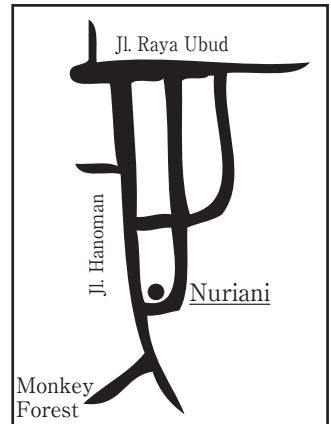
プラマのシャトルバスも、ここで予約できます。もちろんお値段はそのまま。

めんどくさがるの私にとっては、いちいち外に出る必要がないのが嬉しいところ。なんととっても、スタッフがみんな親切で真面目!! これに限りますね!

ホットシャワーも使えるし (しかし、時々止まることもある) 朝食ももちろん付いています。

部屋によってお値段は違いますが、シングル 20,000-ルピア、ダブルなら 30,000-ルピアというところでしょうか。長期滞在なら、多少値引きをしてくれると思います。交渉してみてくださいね。

Jl.Hanoman.Padangtegal Kelod. UBUD  
TELP/975346. 975558 FAX/97346



## 旅人一声 Pesan & Kesan

松阪真生子

今まで、バックツアーの様な旅行ばかりしていた私は、今回、人に頼らずに旅がしてみたいと思いかけてました。

そして、つくづく思い知らされました。

こんなにも、自分がいろんな人のお世話になっているかってこと。

こんなにも、自分がさびしがり屋だったってこと。

人はみんなそれぞれ一人だから、いろんな場所でいろんな人と出会うのがうれしい。そして、どんな時でも人に優しくできる人間でありたいと思う。でも、それがなかなかうまくいかない。でもここバりに居ると、この青い空とまぶしい太陽の下でみんなの笑顔を見ていると、できそうな気がする。

この島では、いつも神様が人の心の奥を見守っている。その人にとって、今一番何が必要なのか分かっていて、それを与えてくれる。時にはそれが、人の優しい笑顔だったり、考える時間だったり…。

私はバリ・ヒンドゥー教については無知ですが、このバリ島自体が宗教の様な存在なのではと感じました。

三歳くらいの子供が、イブにもらったサユールの切れ端をナイフで刻んで、ままごと遊びをしている。五歳の子供が、マッチに火をつけて紙ナフキンを燃やして遊んでいる。日本だったら、すぐナイフやマッチを取り上げてしまうところですよ。子供の育て方ひとつにしても少しづつ違う。毎日の生活となると、たくさん違いがある。それを見ながら自分の生活、日本の良さや辛さを知り、いろんな意味で前進してゆきたいです。そしてきっと、日本に帰ってからもワルンの女の子と、「今日もジャムー売りのおねえちゃん来ないかなあ〜」って店先に座って、のんびりおしゃべりしていた毎日を懐かしく、愛おしく思い出す事でしょう。そして、きっと、また……。



# その他のニュース

## ■心臓破りのロード・レース（自転車レース）開催！



6月22日、テ・ボトルでお馴染みの飲料水メーカー“SOSRO”をメイン・スポンサーにロード・レースが開催されました。プリサレン(王宮)前からスタートし、サッカー場に戻ってくる、40キロのロード・レースです。参加者にはかなり高齢と思われる人もいましたが、ほとんどが、健脚に自信のありそうな若者。自転車は、高級ロード・レーサーあり、マウンテンバイクあり、えっ、こんなので走るのと思うほどのおんぼろ自転車あり。ファッションも本格的なものから、普段着までとさまざま。オープニングはバリならではのウエルカムダンスに、なぜかジェゴグ。“極通”取材班は、バイクでレースを追跡してみました。テガラランに向けて坂を登り、クリキ村のかなり急坂もあり、途中、土のガタガタ道や畔道を飛び越えて、チャンプアン〜ベネスタナン〜ニュークニンを走る、かなりハードなコースでした。のんびりムードで参加した人もいたようですが、ほとんどの人は結構真剣にレースにのぞんでいました。AM9:30スタートでしたが、取材班がサッカー場に戻ったAM11:00にはもうかなりの数の参加者がゴールしていました。沿道の人々が、しばし仕事の手を休め応援し、その声援に励まされ、ほとんどの参加者が完走したそうです。入賞者には、数々の賞品が贈られていました。

## ■バンバン結婚おめでとう！

少々内輪の話になってしまいますが、居酒屋“影武者”のキャッシャーにいつもコワイ顔をして座っている、あのバンバンが、去る6月23日、ついに結婚しました。バリの男性にしては、めずらしい晩婚

(30歳)でしたが、なんとお相手は19歳のギアニヤール出身のバリ美人。「なんだなんだ、相手は日本人じゃないのか」とか、「えっ、?! あんなにカワイイ子がどうしてバンバンと…?」とか、いろいろ外部の声がうるさかったようでしたが、ウパチャラも無事すませた今、ふたりはマニースな新婚生活を送っています。最初で最後の(?)の恋愛(と思われる)でカワイイお嫁さんをGetしたバンバン、よくやった(笑)!

Salamat Menumpuh Hidup Baru!



テレルバンバン

## ■バリ・アート・フェスティバル（バリ芸術祭）・19th開催！

恒例のバリ芸術祭・Pesta Kesenian Bali（地元の人々はP・K・B、ペー・カー・ペーと言う）が6月14日から7月13日までの一ヶ月間、デンパサールのアートセンターを中心に開催されました。オープニング・パレードには、只今人気急上昇中であるJEGOGのスアール・アグン・チームが参加し、いやがおうにも雰囲気盛りあがっていました。催し物は、チャロナラン劇やアルジャ劇、そして、ゴン・クビヤールの大会やGenjekの大会などと、見逃せないものが目白押し。

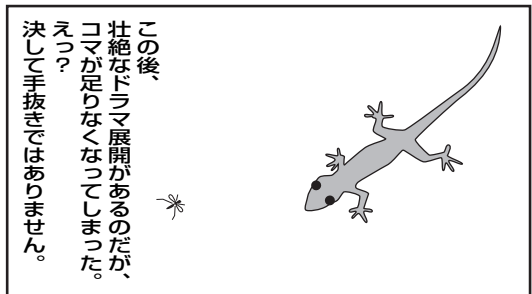
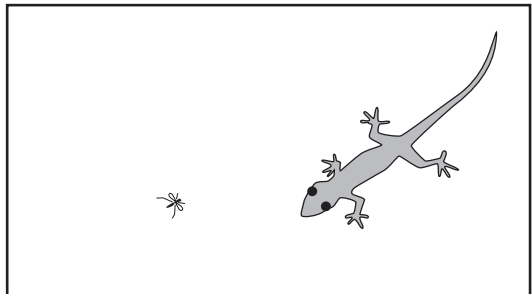
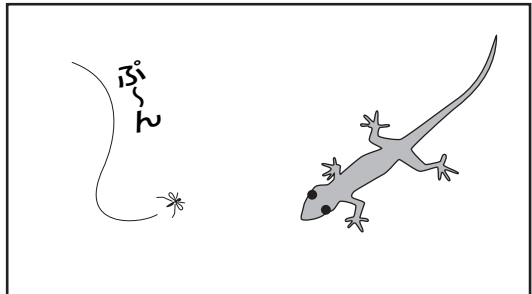
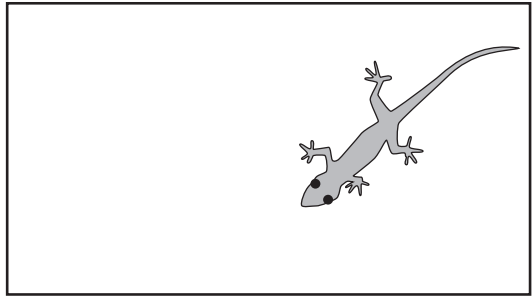
人気の一番はやはり、ゴン・クビヤールの大会。今年はスピード感あふれるトルナ・ジャヤを二人で踊るとするのが課題のひとつ。いかに二人の呼吸と踊りが合うかが採点の基準であるが、どのチームも見事に合っているのには驚きでした。8つの県に、

今回から新しくコディア（KOTA MADYA・中級都市の略）デンパサールが加わり、9つのチームで競い合い、優勝はバドゥン県、二位はコディア・デンパサールに決まりました。残念ながら我がギアニヤール県は今年はダメだったようです。そして、レディースのゴン・クビヤール大会は、我がUBUDのブンゴセカン村のレディース・チームが優勝しました。

取材した「極通」スタッフの個人的なお気に入り、7月9日：S・T・S・Iの野外ステージで行なわれた、バリ日本人会のイブイブたちによる Gerantan Pelog 演奏と日本から出場した名古屋音大の女性たちによる JEGOG 演奏でした。フィナーレのスウェントラ氏の指揮によるスアール・アゲンとのムバランは、ロックの演奏会場のような盛り上がりを見せしていました。今から来年のP・K・Bが楽しみです。



## うぶなヤモリその21



この後、  
 壮絶なドラマ展開があるのだが、  
 コマが足りなくなってしまった。  
 えっ？  
 決して手抜きではありません。

### 【年間購読申込み方法】

エアメールで、その旨手紙をください。宛先は「影の出版会：伊藤」、住所は巻末のBALI本部です。料金は、4,000円。おろかえし申込み用紙と送金方法をお知らせします。また、お急ぎの方は、郵便振替用紙の通信欄に年間購読希望と書いて送金してください。振替先口座：00190-6-573859「影の出版会」です。

## ■お詫び！

Vol.19の“デートスポット in BALI”の記事について、読者の方から貴重な情報がありました。「極通」スタッフは、バリにラブ・ホテルはないものと思っていましたが、どうも存在するようです。情報提供者は女性の方で、2年前の旅でクルンクンの街に立ち寄り宿を探していたところ、正面に一棟と奥にもう一棟のある宿を発見。空き部屋が奥の棟しかなくてそこは少し汚なかったが、安いので泊まることにしたそうです。が、どうもそこがラブホテルだったようです。奥の棟には、昼間から次から次と地元のアベックがやってきては部屋に入り、そして数時間で帰っていくという状況が夕方まで続いたのを目撃したそうです。これはもうラブ・ホテルに間違いないと確証したそうです。気がついた彼女は翌日に宿を変ったそうです。



## 【おしらせ】

次回より、川柳のコーナーを設けたいと思います。やはり「極通」のやること、バリをことを詠みたいと思います。しかし、残念ながらバリには四季がなく季語らしいものが見つかりません。そこで、季語の代わりに課題として言葉を提供することにします。第一回の今回は、やはり「バリ」をいれたいと思います。どしどしご投稿ください。

## アムゴンバン

Pengumuman

### ●バリ本部よりお願い。

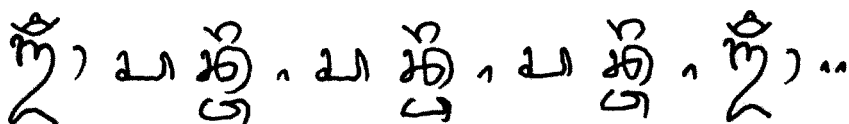
宛名書きの円滑を計るため新たにお申し込みの方は、申込用紙を必ず送付ください。申込用紙の送付されていない方への〔極楽通信 UBUD〕の発送が遅れることがありますのでご了承ください。

### ●お譲りください

★子供用（1～2歳）の日本の絵本。使い古しで結構です。もしUBUDまでお見えになるのでしたら、お宿まで取りに伺います。お電話ください。

★子供用のカーシート。これも使い古しで結構です。こんなデカイもの持ってきてくれる人はいないと思いますが、希望を託してお願いすることにしました。バリならではのお礼た～くさんしますう

TELP：299635 -ゆみ-







Terima Kasih



発行人：伊藤博史

編集：伊藤博史 / 佐藤由美 / 堀 祐一 / 中田 恵

エディトリアルデザイン：菅原恵利子

写真：堀 祐一 / 伊藤博史

カバーイラスト：成田君子

極楽通信「UBUD」Vol. 21

1997年8月25日発行

発行・販売：影の出版会

Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha

Jl. Suweta No.16, Ubud. Bali,  
80571, Indonesia tel.(0361)96134

©1997 影の出版会 禁無断掲載





影の出版会事務局

- BALI 本部 Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha Jl.Suweta No.16,  
Ubud. Bali, 80571, Indonesia tel.(0361)96134
- 日本連絡先 〒 143 東京都大田区山王 3-29-1 ブルク山王 302  
ポトマック株式会社内, tel.03(5743)7100 fax.03(5743)7101